

結果の考察と指導改善のポイント

1 教科に関する調査

- 成果と課題及び指導改善のポイント
 - ・ 小学校国語
 - ・ 中学校国語
 - ・ 小学校算数
 - ・ 中学校数学

2 児童生徒意識調査（児童生徒質問紙調査）

- 結果の考察と指導改善のポイント
 - ア 授業に対する関心、理解、有用性について
 - イ 学校での学習について
 - ウ 家庭での学習について
 - エ 学校生活、家庭生活について
 - オ 教師意識調査から

平成29年7月10日（月）

佐賀県教育委員会

1 教科に関する調査

○ 成果と課題及び指導改善のポイント

小学校国語（小学5年生、小学6年生、中学1年生）

成果(◇)と課題(◆)

- ◇ 考えたことや聞き出したことから話題を決めたり、目的に応じて話の構成を工夫したりすることができている。(中学1年生¹二、四)
- ◇ 平成28年度[12月調査]で「おおむね達成」の基準を下回っていた「登場人物の気持ちを捉えること」を問う設問が、「おおむね達成」の基準を上回っており、改善の傾向が見られる。(小学6年生B問題³一)
- ◇ 文脈に即して漢字を正しく読むことについては、相当数の児童ができている。(小学5年生⁵一、小学6年生A問題⁷346、中学1年生⁵一)
- ◆1 メモを基に、書こうとすることの中心を明確にして文章を書いたり、図を基に、自分の考えを書いたりすることに課題が見られる。(小学5年生²五、中学1年生²四)
- ◆2 段落相互の関係を捉えたり、文章の内容を的確に押さえたりすることに課題が見られる。(小学5年生⁴一、中学1年生⁴一)
- ◆3 物語を読み、具体的な叙述を基に、登場人物の気持ちの変化を捉えたり、自分の考えの理由を明確にしてまとめたりすることに課題が見られる。(小学5年生³二、小学6年生B問題³三)

平成28年度佐賀県小・中学校学習状況調査[12月調査]Web 報告書 参照

指導改善のポイント

- ◆1 メモを基に、書こうとすることの中心を明確にして文章を書く力を育成するためには、取材した事柄や調べた内容をまとめたメモを基に、記事を書く活動を設定する必要がある。その際には、取材した事柄や調べた内容の中から、文章の中心となる情報を取捨選択させ、適切な接続詞や文末表現を使って、読み手に分かりやすい記事となるよう考えて書かせることが大切である。また、図を基に、自分の考えを書く力を育成するためには、図表やグラフから情報を読み取り、必要な情報について適切な言葉を用いて書く活動を設定する必要がある。その際には、図表やグラフと文章を関係付けながら読ませ、読み取ったことを的確に表現することができるように指導することが大切である。さらに、書くことの指導では、字数や文末表現などの条件を設定して、条件を満たした文を書く活動を計画的に取り入れることも大切である。
- ◆2 段落相互の関係を捉える力を育成するためには、文と文、段落と段落の関係を押さえながら文章全体の内容を捉えさせることが必要である。具体的には、事実や意見などを区別させたり、それらの関係を捉え、図や表などに構造的にまとめさせたりすることが大切である。また、文章の内容を的確に押さえる力を育成するためには、理由や根拠、筆者の主張などが書かれている形式段落や文と文のつながりを捉えさせて読ませることが必要である。具体的には、中心となる語や文に着目させ、文章に何が書いてあるのかを明確にしながら読ませていくことが大切である。
- ◆3 叙述を基に、登場人物の気持ちの変化を捉えたり、自分の考えの理由を明確にしてまとめたりする力を育成するためには、一つの場面の叙述だけを対象とするにとどまらず、複数の場面を比較したり、物語全体に広がっている複数の叙述を関係付けたりして読ませることが必要である。さらに、高学年においては、場面の展開に沿って読みながら、感動やユーモア、安らぎなどを生み出す優れた叙述に着目して自分の考えをまとめることができるように指導することが大切である。その際、目的を明確にさせて叙述を読ませ、自分の考えをまとめさせるように指導することも大切である。具体的には、読んで考えたことを発表し合ったり、本の帯を書いたりすることを言語活動として位置付けて、叙述と自分の考えを関係付けながら、印象の残った場面を紹介させることなどが考えられる。



ぜひ ご活用ください！ → [ここをクリック](#)

佐賀県教育センターのプロジェクト研究では、学習状況調査から見える課題の解決に向けた授業づくりに取り組んでいます。「単元で学び、単元で力をつける」をキーワードにした授業づくり、第4・5・6学年の「学習指導案」や「ワークシート」を提案しています。授業づくりに役立ててください。

中学校国語（中学2年生、中学3年生）

成果(◇)と課題(◆)

- ◇ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容を理解することができる。
(中学2年生⁵一、中学3年生A問題⁶一、B問題¹二)
- ◇ 話の論理的な構成や展開に注意して聞いたり、必要に応じて質問し、自分の考えとの共通点や相違点を整理したりすることができる。
(中学2年生²二、中学3年生B問題²二)
- ◇ 集めた材料を分類、整理して文章を構成することができる。
(中学2年生³一、中学3年生B問題³一)
- ◆ 1 話合いの話題や方向を捉えて的確に話したり、相手に分かりやすいように語句を選択して話したりすることに一部課題が見られる。
(中学2年生¹二、中学3年生A問題⁷一)
- ◆ 2 書くにあたって必要な情報を集めるための見通しをもったり、情報を因果関係に基づいて整理したりすることに一部課題が見られる。
(中学2年生³三、中学3年生B問題³三)
- ◆ 3 表現の仕方について捉え、自分の考えをまとめることに一部課題が見られる。
(中学2年生⁵三、中学3年生B問題¹三)

指導改善のポイント

◆ 1 話合いの話題や方向を捉えて的確に話す力を育成するためには、話合いの相手や対象、目的を理解し、それに応じて話すことができるように指導することが大切である。そのためには、授業の中で互いの発言を検討したり、合意形成をしたりする場面を設定することが必要である。また、相手に分かりやすいように語句を選択して話す力を育成するためには、話合いの中で聞き手の話の受け止め方を考え、適切な語句の選択をして話すことができるように、相互評価や振り返りを活用し、相手意識を育てることも大切である。

◆ 2 書くにあたって必要な情報を集めるための見通しをもつためには、生徒が必要な情報を調べる活動を行う際に、目的や意図に応じた適切な調査方法について、生徒自身が考え、選択することができるようにすることが必要である。文献調査やインタビュー、アンケートなどの調査方法について教科書の巻末資料などを用いて、事前に学習を行わせ、それぞれの実施方法や気を付けるべき点を理解させておくことも大切である。情報を因果関係に基づいて整理する力を育成するためには、因果関係を図にすることが大切である。生徒が自らまとめることができるようにするためにロジックツリーやボーン図など思考ツールを板書で活用し使い方を示した上で、生徒が因果関係を図にする学習活動を行うことも考えられる。

◆ 3 表現の仕方について捉え、自分の考えをまとめる力を育成するためには、表現の技法のような基本的な知識については、ワークシートなどにまとめて生徒に渡しておき、折に触れて確認させるようにして知識の定着を図ることが大切である。生徒に自分の考えをまとめさせるためには、生徒が課題意識をもって、主体的に読み進めることができるような単元づくりが必要である。そのためには、例えば、「登場人物を人物描写によって分析し、人物紹介リーフレットを作ろう」のように、指導事項（人物描写）、思考操作（分析）、言語活動（人物紹介リーフレット）を学習課題の中で明示し、生徒に学習計画を作成させることが必要である。また、そのような単元を、年間計画に系統的に位置付けて計画的・継続的に指導を行うことが大切である。



ぜひ ご活用ください！ → [ここをクリック](#)

佐賀県教育センターのプロジェクト研究では、学習状況調査から見える課題の解決に向けた授業づくりに取り組みました。「学習課題設定の工夫」や「主体的な学習を促す言語活動の工夫」をキーワードに、「読むこと」の領域の第1・2学年の実践事例や「ワークシート」について提案しています。授業づくりに役立ててください。

小学校算数（小学5年生、小学6年生、中学1年生）

成果(◇)と課題(◆)

- ◇ 小数の加法や整数の乗法と分数の乗法の基礎的な技能が身に付いている。
(小学5年生 $\boxed{1}$ (1)、小学6年生A $\boxed{2}$ (1)、中学1年生 $\boxed{1}$ (2))
- ◇ 立体図形の頂点の位置関係や、面と面の位置関係についての知識が身に付いている。
(小学5年生 $\boxed{10}$ (1)、小学6年生 $\boxed{7}$)
- ◇ グラフから資料の分布の様子を理解したり、変化の特徴を読み取ったりすることができている。
(小学5年生 $\boxed{13}$ 、中学1年生 $\boxed{8}$)
- ◆ 1 整数と小数の大小関係や分数の大小関係の理解に課題が見られる。
(小学5年生 $\boxed{2}$ (2)、中学1年生 $\boxed{6}$ (1))
- ◆ 2 式や結果の数値の意味を解釈することについて課題が見られる。
(小学5年生 $\boxed{14}$ 、中学1年生 $\boxed{7}$)
- ◆ 3 示された考えを解釈して他の場面に適用することや、解釈して考えたことを説明することに課題が見られる。
(小学5年生 $\boxed{9}$ 、小学6年生B $\boxed{2}$ (2) B $\boxed{3}$ (2))

指導改善のポイント

- ◆ 1 整数と小数の大小関係を比較できるようにするためには、小数の意味と表し方を理解させる必要がある。例えば、3.8という数について「1が3個、0.1が8個ある」という見方や「0.1が38個ある」という見方などの複数の見方を通して、小数についての理解を深めさせることが考えられる。また、分数の大小関係を比較できるようにするためには、分数の意味と表し方を理解させる必要がある。例えば、 $\frac{3}{2}$ は $\frac{1}{2}$ の3つ分というように、単位分数の幾つ分という見方をしたり、分数を数直線や図などに表したりすることで、分数の意味や大きさについて理解を深めさせることが考えられる。
- ◆ 2 式や結果の数値の意味を解釈する力を育成するためには、式の意味や結果の数値の意味を考える活動を設定することが大切である。立式をした際には、なぜそのように立式できたのか、また、計算をした後は、結果の数値が何を表しているのかなどを考えさせることが必要である。その際には、式や結果の数値の意味を、具体的な問題場面と関連付けながら、図や言葉を用いて説明させることが大切である。
- ◆ 3 示された考えを解釈して他の場面に適用する力や、解釈したことを用いて考えたことを説明する力を育成するためには、友達の考えを解釈したり説明したりする活動を設定することが必要である。例えば、ある児童がかいた図や式のみを紹介し、他の児童にその意味を解釈させたり説明させたりすることが考えられる。その際には、分かっている児童のみの活動にならないようにするために、一人で考える時間や友達と話し合う時間を設定することが大切である。また、問題を解決した際には、見いだした考え方や解決方法を、他の場面に適用させたり数値を変えて考えさせたりすることも大切である。そのために、ある考え方や解決方法を全員で確認した後は、「どんな数でもできるのか」、「いつでもできるのか」などと問い、見いだした考え方を他の場面に適用できないか、数値を変えても同じ解決方法が使えないかなどを考えさせることが大切である。

ぜひ ご活用ください！ → [ここをクリック](#)

佐賀県教育センターのプロジェクト研究では、学習状況調査から見える課題の解決に向けた授業づくりに取り組みました。「導入の段階の工夫」や「練り合いの段階の工夫」をした授業づくりについて提案しています。授業づくりに役立ててください。

中学校数学（中学2年生、中学3年生）

成果(◇)と課題(◆)

- ◇ 整式の加法と減法の計算をすることができる。(中学2年生¹(3)、中学3年生A問題²(3))
- ◇ 簡単な一元一次方程式を解くことができる。(中学2年生²(4)①、中学3年生A問題³(1))
- ◇ 与えられた表やグラフ、資料などから、必要な情報を適切に読み取ることができる。
(中学3年生B問題³(1)、中学3年生B問題⁵(1))
- ◆1 扇形の弧の長さを求めることに課題が見られる。(中学2年生⁶(1)、中学3年生A問題⁴(3))
- ◆2 与えられた度数分布表について、ある階級の相対度数を求めたり相対度数を求める式に表したりすること、また、範囲を求めることに課題が見られる。
(中学2年生⁹(1)、中学3年生A問題¹⁴(1)(2))
- ◆3 事柄が成り立つ理由や問題解決の方法、判断の理由などを数学的な表現を用いて説明することに課題が見られる。
(中学2年生¹⁰(2)、中学3年生B問題²(3)³(2)⁵(3))

指導改善のポイント

- ◆1 扇形の弧の長さや面積を求めることができるようにするためには、扇形を円の一部分として捉え、弧の長さや面積がその中心角の大きさに比例することを確認する場面を設定することが必要である。ピザやケーキを切り分けるような実生活の場面と結び付けて理解を深めさせるようにし、円を紙で作って、折ったり切ったりするなどの観察、操作や実験を通して、円と扇形を関連付け、扇形の弧の長さや面積とその中心角の大きさの関係を捉える活動を取り入れることが大切である。
- ◆2 相対度数の必要性と意味について理解できるようにするために、生徒にとって身近な場面で、度数の合計が違い、階級の度数をそのまま比較することが適切でないような問題を扱い、ある階級の度数の総度数に占める割合を求めて、資料の傾向を読み取る活動を取り入れることが大切である。また、範囲の意味を理解できるようにするために、範囲とは資料の最大値と最小値との差であることを確認した上で、資料の散らばりの程度を捉える活動を取り入れることが大切である。「資料の活用」は第1学年最後の指導内容であるが、目的に応じて資料を収集し、表やグラフに整理し、代表値や資料の散らばりを用いて資料の傾向を捉え説明する時間を確保することが必要である。
- ◆3 事柄が成り立つ理由や問題解決の方法、判断の理由などを数学的な表現を用いて説明する力を育成するためには、実生活における問題を数学を活用して解決する場面を設定し、問題解決のために何をどのように用いればよいかを明らかにしたり、根拠を明確にして成り立つ理由や判断の理由を説明したりする活動を行うことが必要である。その際、互いに自分の考えを表現し伝え合う活動を取り入れ、必要な条件を用いて説明できているか、根拠に基づいて説明できているかを確認させ、結論を含めて言葉で的確にまとめさせることができるような指導を充実することが大切である。



ぜひ ご活用ください！ → [ここをクリック](#)

佐賀県教育センターのプロジェクト研究では、学習状況調査から見える課題の解決に向けた授業づくりに取り組みました。数学的に説明し伝え合う活動を充実させた第1・2学年の「詳細授業展開案」と「ワークシート」を提案しています。内容・領域「関数」「図形」の授業づくりに役立ててください。

2 児童生徒意識調査（児童生徒質問紙調査）

○ 結果の考察と指導改善のポイント

ア 授業に対する関心、理解、有用性について

「各教科の勉強は好き」という問いに肯定的に回答した児童生徒の割合が前年度を上回った学年・教科は増えており、「各教科の授業の内容はよく分かる」「各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」という問いに肯定的に回答した児童生徒の割合が前年度を上回った学年・教科はほぼ同数であることから、児童生徒の授業に対する関心は若干高まっていると考えられる。

中学1年の多くの教科で、「各教科の勉強は好き」「各教科の授業の内容はよく分かる」という問いに肯定的に回答した児童生徒の割合が減少していることから、小学6年における学習もしくは、小・中学校の接続の部分に何らかの課題があることが考えられる。

（指導改善のポイント）

□ 知的好奇心を喚起する授業づくり

新学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。この「主体的な学び」の最も根幹にあるのが、学習対象への興味・関心である。授業の導入において、教材との出会わせ方を工夫し、児童生徒が学習内容を「自分事」として捉えられるようにし、単元を通して、その気持ちが持続できるような指導の工夫が求められるところである。

□ 「分からない」児童生徒への迅速かつ適切な対応と学習内容の定着を図る指導の工夫

「分からない」と回答した児童生徒については、早急に対応する必要がある。「分からない」原因はそれぞれに異なると考えられるので、必要に応じて個別の対応が求められる。また、「分かる」と回答していても、該当教科の調査結果が思わしくない場合には、学習内容の定着が図られていないことが考えられる。反復練習的なドリル学習だけに終始することなく、学習したことを活用して考える場面などを多く設定するなどして、意図的に学習内容を繰り返し使いながら、身に付けていくような手立てを工夫する必要がある。

□ 学習内容の有用性を実感できる授業の工夫

児童生徒の「役に立つ」という意識は、授業の中で、他の学習場面や他の教科・領域との関連を意識させること、日常生活とのつながりに気付かせること、学習したことを活用させる場面を意図的に位置付けることなどによって育まれる。平成27年度から取り組んでいる「児童生徒の活用力向上研究指定事業」では、今年度、新たに8中学校区24校を指定し、県内16中学校区48校（義務教育学校1校含む）で研究が推進されている。このような先進的な取組等も参考にしながら、児童生徒の活用力を高め、児童生徒に学習内容の有用性を実感させることができるような指導を工夫する必要がある。

イ 学校での学習について

「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う」「授業では、学級との友達(生徒)の間で話し合う活動をよく行っていると思う」という問いに肯定的に回答した児童生徒の割合は全体的に増加しており、学習者主体の授業づくりが浸透している状況がうかがえる。教師意識調査において、「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」という問いに「多くの単元で行っている」と回答した教師が小学校、中学校ともに増加し

ていることとも呼応している。

また、各教科の学習活動に関する意識や態度を問う質問項目において、多くの学年・教科で肯定的な回答をした児童生徒の割合が増加していることから、児童生徒の学習活動に取り組む意識の向上や態度の形成が図られていると考えられる。

(指導改善のポイント)

□ 児童生徒意識調査の各教科の学習活動に関する質問項目の再確認

県調査の児童生徒意識調査に示している各教科の学習活動に関する質問項目（小学校は39～51、中学校は42～57）は、それぞれの教科における児童生徒の望ましい意識や態度をモデル化したものとなっている。（中学校56は例外）したがって、日頃の授業の中で、質問項目にあるような児童生徒の意識や態度が育っているかという視点で、自らの授業を見直してみることが有効である。例えば、「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている」（小・中 国語）という質問項目に着目すると、指導する単元や1単位時間の授業における、自分の考えを書かせる場面で、考えの理由が分かるように気を付けて書くことができるような指導をしているのかという視点で授業を見直してみるとよい。

□ 児童生徒の主体的な活動を支える3つの視点のチェック

授業における書く活動やペアやグループでの話し合う活動など、児童生徒の主体的な活動を展開するに当たって、①モチベーション(その活動に取り組むことに児童生徒の必然性はあるか、児童生徒は取り組みたいと思っているか)、②スキル(その活動の進め方やゴールなどを児童生徒は理解しているか)、③コンテンツ(取り組む内容は児童生徒にとって魅力的であるか、児童生徒は取り組む価値を感じているか)の3つの視点が整っているかどうかを教師は常に考えておく必要がある。いずれかが欠けていると、児童生徒の主体性を欠くことにもなる。大切なキーワードは、児童生徒が「やりたい、やれそう、やってよかった」と思えるような活動にすることである。

ウ 家庭での学習について

家庭学習の時間は、校種・学年によって、いくらか増減があるものの全体としては大きく変わらない。しかしながら、家庭学習の取組において、「自分で計画を立てて勉強している」という問いに肯定的に回答した児童生徒は全体的に増加しており、児童生徒が見通しをもって計画的に学習に取り組むことができるようになってきている様子がうかがえる。一方で、いずれの校種・学年においても、「30分より少ない」「全くしない」という児童生徒が一定数いることについては引き続き課題であり、個別の手立てが必要である。

学校の宿題については、小学校(中学1年を含む)では約9割、中学校では7割から8割の児童生徒が「している」と回答しており、小学5年と中学2年では増加していることから、学校の宿題に対する児童生徒の取組状況はこれまでと同様に高い水準にある。

「学校の授業の予習をしている」という問いに肯定的に回答した児童生徒は小学5年で増加しているが、その他の校種・学年では減少している。「している」と回答した児童生徒の割合は中学1年が最も高く2割であるが、その他の校種・学年は2割未満である。「学校の授業の復習をしている」という問いに肯定的に回答した児童生徒は小学5年で増加しているが、その他の校種・学年ではほぼ同数である。「している」と回答した児童生徒の割合は中学1年が最も高く3割弱であるが、その他の校種・

学年では約2割である。これらのことから、児童生徒の家庭学習の内容は復習中心であることがうかがわれる。教師が出す宿題の内容が、復習的な内容が中心であることにも起因していると考えられる。

(指導改善のポイント)

□ 家庭学習の質の充実

家庭学習の習慣化を図るためには、小学校低学年からの家庭と連携した指導が重要である。「家庭で学習をする」という習慣を早い段階から身に付けておくことが、家庭学習の時間の充実につながる。また、児童生徒の発達の段階にもよるが、学年が上がるにつれて、「何時間行ったか」「何ページ書いたか」といったような量的な基準だけでなく、「分かるまで行ったか」「できるようになるまで行ったか」「覚えるまで行ったか」といったように家庭学習の内容を重視した質的な充実を図ることも大切である。

□ 復習的な内容の宿題と予習的な内容の宿題のバランスを図る工夫

学校の宿題に対する児童生徒の取組状況はこれまでと同様に高い水準にあることから、宿題の在り方やその内容について、教師の間で議論を交わすなどして、学校としての宿題の質を充実させることが、学習内容の定着や授業における主体的な学習への取組を実現するのに有効であると考えられる。

その一つの視点として、復習的な内容の宿題と予習的な内容の宿題のバランスということが挙げられる。児童生徒に課されている宿題の多くは、授業における学習内容の定着を図るための復習的な内容の宿題である。そのこと自体を否定するものではないが、児童生徒が次時の授業内容を見通すことができる予習的な内容の宿題を工夫することによって、児童生徒の主体的な授業への取組が促進されることや、予習的な内容の宿題を授業の中で活用することによって、児童生徒の授業に対する参加意識が高まることが期待される。「授業→復習的な内容の宿題」だけでなく、「予習的な内容の宿題→授業」ということも視野に入れた授業構想に取り組みされてはどうか。

また、復習的な内容の宿題についても、児童生徒の発達の段階に応じて、例えば、「習った漢字を10回書いてくる」宿題だけでなく、「習った漢字を使って文をつくる」宿題を課すなどして、「書けるようになる」ための宿題なのか、「使えるようになる」ための宿題なのかといったように、ねらいを明確にした宿題の出し方を工夫することも大切である。

エ 学校生活、家庭生活について

学校生活では、「学校に行くのは楽しいと思う」「学校では落ち着いて勉強することができている」という問いに肯定的に回答した児童生徒の割合は全体的に増加しており、いずれも8割から9割であることから、多くの児童生徒が楽しく学校生活を送り、落ち着いて学習に取り組むことができていることがうかがわれる。

家庭生活では、平日に2時間以上テレビやビデオ・DVDを視聴する児童生徒の割合は全体的に減少しているが、平日に携帯電話やスマートフォンを1時間以上使用している児童生徒の割合は全体的に増加している。

(指導改善のポイント)

□ 学力向上の基盤となる環境の維持・向上

学力向上を図る基盤として、児童生徒が楽しい学校生活を送り、落ち着いて学習に取り組める環境

が整っているということは大切な要件である。県全体としては良好な状態にあると考えられるが、それぞれの学校において、児童生徒にとっての良好な学習環境が整っているかどうかということを定期的に確認するとともに、維持・向上に努めることが大切である。

□ 家庭での過ごし方を主体的に見直すことができる指導

毎日、家庭での学習時間や生活の様子を記録させるなどして、家庭での様子を把握している学校や教師は多いと思われる。家庭での過ごし方に課題がある児童生徒については、家庭と連携しながらの個別指導が必要である。特に小学校の低学年や中学年においては、保護者や本人から情報収集をするなどして、平日の帰宅後や学校が休みの日に家庭でどのように過ごしているのかを把握しておくことが大切である。小学校高学年や中学校では、家庭での過ごし方を児童生徒が主体的に見直すことができるような指導が大切である。具体的には、学級活動などにおいて、児童生徒が自分の家庭での過ごし方を見直し、改善を図ることができるような取組を行うことなどが考えられる。

オ 教師意識調査から

「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」という問いに「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合や「ノートのまとめ方や話し合いの進め方など、学習方法についてきめ細やかに指導を行っていますか」という問いに「行っている」と回答した教師の割合は増加しており、児童生徒主体の学習活動の充実が図られていると考えられる。また、「授業の中で目標(めあて・ねらい)を児童に示す活動を計画的に取り入れていますか」という問いに「取り入れている」と回答した教師は前年度を下回っているが、小学校では8割、中学校では6割を超えており、他の質問項目より高い水準にある。一方で「授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れていますか」という問いに「取り入れている」と回答した教師の割合は全体的に減少している。

(指導改善のポイント)

□ 「授業づくりのステップ1・2・3」の積極的な活用

前述した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けては、学習者主体の授業づくりを行うことが必然となる。「授業づくりのステップ1・2・3」では、授業づくりの基本的な視点を「めあて」、「まとめ」、「書く活動」、「話し合う活動」、「振り返り」の5つに焦点化し、それぞれを3つのステップで示している。ぜひ、自らの授業の日々の振り返りや校内授業研究会での参観の視点などに積極的に活用し、児童生徒にとっての「主体的・対話的で深い学び」となっているかどうかといった視点で不断の見直しを図り、授業の質的な改善につなげてほしい。

以上、意識調査結果の考察と指導改善のポイントについて示している。各学校の実態や学校を取り巻く環境はそれぞれに異なると思われるので、各学校においても調査結果についての考察を行い、参考となる指導改善のポイントについてはぜひ活用していただきたい。

